

学 位 論 文 要 旨

氏 名 北岡 大輔

題 目 特別支援学校（知的障害）高等部のキャリア教育における
本人参画を促すための指導に関する研究

本研究の目的は、知的障害のある生徒が抱える様々な心理的課題や特性に対応し、進路検討過程への本人参画を促すための、特別支援学校（知的障害）高等部（以下、高等部）におけるキャリア教育のフレームワークを提案することである。

従来、知的障害のある生徒のキャリア教育においては、本人の働ける職場をいかに見つけるか、職場にいかに適応させるかといった、社会の枠組みへの順応を促す指導が中心であった。そのため、生徒本人にとっては受動的な進路選択となりやすく、自らの願いや思いを抱けないまま、あるいは願いや思いを抱いたとしても、現実とのはざまで心のうちに抑え込んだまま就職しているケースも少なくない。

こうした現状を踏まえ、高等部におけるキャリア教育では、生徒の自己理解と意思形成を支え、進路検討過程への本人参画を促すための指導と評価の観点の明確化が求められている。本研究ではこのフレームワークを構築するにあたり、二次障害を呈する生徒を対象とした学習プログラムである「セルフデザイン」の援用を試みた。

第1研究では「セルフデザイン」の自己理解と意思形成を支える指導としての有用性と課題を精査した。その結果、生徒同士の関わり合いを生かした指導は、生徒の自己理解の深化に効果があり、生徒が自らの気持ちや考えを振り返り、次に取り組むべきことを見出していく学習プロセスが意思形成に寄与していることが有用性として確認された。一方で、自己理解や意思形成を促すための具体的な手立ての不明確さや将来の見通しを持つための情報提供の不足、大人の関わり方によっては生徒の意思を抑制し得ることなど課題として見出された。

第2研究では、高等部のキャリア教育に関する先行研究を概観し、到達点と課題を明確化した。現在は職業科や作業学習、現場実習等による、職業生活へのスムーズな移行を促す進路指導が確実に進められている一方で、自己理解や内面を育てる指導に関する実践の蓄積は不十分であり、教育課程への位置付けや指導・評価の方法に課題があることが明らかとなった。このことを踏まえ、「対人関係性を生かした指導法の開発」「自尊感情に配慮した段階的な指導の枠組みづくり」「本人参画による学習計画と評価の仕組みづくり」「教育課程上の位置付けの整理」の4点を課題として提起した。

第3研究から第5研究では、これらの課題に対応すべく、X高等部の「セルフデザイン」に関わる生徒・保護者・教師への調査を行い、フレームワークの構成要素の具体化を試みた。

第3研究では、生徒本人を調査対象とし、個々の障害特性や心理状態に応じた指導において、共通して留意すべき観点を抽出した。その結果、「生徒同士の互惠的関係の構築を目指す授業づくり」「本人の課題意識や葛藤の汲み取り」「客観的評価と自己評価のすり合わせ」「具体的な将来のイメージを描くための情報提供」の4点が抽出された。

第4研究では、保護者を調査対象とし、進路検討過程への本人参画を促すために扱うべき指導内容、及び保護者と協働して指導を行うための観点を検討した。その結果、指導内容としては、自己の好みや価値観についての自己理解の学習、社会生活や職業生活に関する学習を扱う必要性が示された。また、保護者と協働して指導を行うための観点として、進路に対する保護者の高い関与意識や悩みを受け止めた上で、その思いに沿って本人が納得して進路選択できるような方略の検討が重要であることが確認された。

第5研究では、「セルフデザイン」の指導経験がある教師を対象に調査を行い、自己理解と意思形成を支える授業場面に着目し、教師が生徒を見取る際の視点や、指導における重視すべき視点を分析した。その結果、まず、生徒を見取る際には、「意思が抑え込まれている言動」「外向性の高まり」「様々な考え方があることへの気付き」「『自分としては』を見出しているか」「生徒同士の影響の及ぼし合い」に着目することの重要性が示唆された。また、ダイナミック・アセスメントによる指導内容の柔軟な調整を行う意義や、指導において重視すべき視点として「教育課程への明確な位置付けと関連付け」「段階的かつ動的な指導計画」「提示する事柄の明確化」「生徒の価値観や考え方に沿うためのマインドセット」「表現・意識化・思考を促す支援」が示された。

以上の成果を踏まえ、本研究では進路検討過程への本人参画を促すキャリア教育として2つのフレームワークを提案した。

1つ目は「本人参画に至る全体のフレームワーク」であり、入学時に何らかの心理的課題を抱える知的障害のある生徒が、進路検討過程への参画に至るまでの全体的なプロセスを可視化した。生徒の育ちを「職業や社会生活に関する理解」「特性、価値観、強み・弱みの自己理解」「判断の主体者であるという実感を伴う意思形成」の3つの側面から捉え、それらを統合することにより進路意識の明確化が促されることを示した。

2つ目は「自己理解と意思形成を支える授業のフレームワーク」であり、指導と評価の観点を整理した。「学習目標」「ベースシステム」「前提となる教師の構え」「重視すべき視点」「評価の観点（ダイナミック・アセスメント）」「指導の工夫」の6つの構成要素からなり、それぞれを「概ねの学年段階」ごとに示した。